

## レザー・シャー独裁下のあるリベラルな政治家の役割と限界

—モハンマド・アリー・フォルーギー（1877-1942）の場合—

吉村慎太郎

### 1. はじめに

1979年イラン革命でその支配に終止符を打たれたパフラヴィー王政（1925-1979）が独裁政権であったことは今更言うまでもない。レザー・シャー及びモハンマド・レザー・シャー親子二代に及ぶこの独裁支配はもっぱらシャー（国王）に従属的かつ冷徹な支配装置、特に軍部・秘密警察と言った弾圧組織と官僚機構によって支えられた。しかし、一方でリベラルな民族主義者、民主主義的文民政治家・知識人が一時的であれ、かかる独裁を擁護したことも看過されてはならない。その意味で、独裁政治の展開過程における彼らの関与の動機と役割は慎重に検討すべき重要な課題である。

レザー・シャー軍事独裁政権（1925-1941）について言えば、19世紀以来の半植民地主義的な英露支配からの解放と統一的な近代国家建設を可能にする中央集権的な政府樹立がそうした彼らに独裁さえ「容認」させた第一の理由と考えられる<sup>1)</sup>。ガージャール朝（1779-1925）専制の打倒と英露二極支配からの脱却を求め、立憲革命（1905-11）を支持した民族主義者を筆頭に「パフラヴィー王政期のアクター(Bazigaran-e'Asr-e Pahlavi)」の一部を構成した彼らの多くはだが、シャーによりその役割を終えたと見なされるか、或いは政治的脅威と目されるや、排除・粛正の対象となった。

レザー・シャー支配初期段階に辣腕を振った宮廷大臣アブドゥル・ホセイーン・ハーン・ティムールターシュはそうした粛正対象の好例と言える。新王朝成立直後から軍事部門を例外に行政全般を指導した彼は1932年に収賄容疑により突如解任・逮捕され、その翌年に獄死した<sup>2)</sup>。旧ガージャール有力貴族として国内外の政治的人脈から無視できぬ有力政治家であり、1927-1929

年に財相ポストにあったフィールーズ・ミールザー・フィールーズの場合も収賄罪で逮捕され、一旦釈放されたが、1938年に獄中で同じ運命を辿っている。彼らと共に、レザー・シャー政権初期段階の「三頭政治」家のひとり、イランの近代的司法制度改革と世俗的な法導入に指導力を発揮したアリー・アクバル・ダーヴァルは、1932年の財相就任から5年後に阿片吸引自殺を遂げた。更に、1932-34年の一連の部族長逮捕・処刑実施の中で、パフティヤール一族有力家族の一員として1928年以来陸相職を担ったジャアファル・ゴリー・ハーン・サルダール・アスアドも33年に逮捕・収監され、その翌年には刑務所内で非業の死を遂げている。以上の如く、有力政治家の相次ぐ政治舞台からの退場で、レザー・シャー政権は益々その独裁的な性格を露わにしていく<sup>3)</sup>。

その他、生命こそ奪われた訳ではないが、立憲革命以降イラン政治の中樞を担った有力文民政治家の中で、政界からの引退を余儀なくされた者も数多い。過去幾度も首相を務め、テヘラン選挙区で常に上位の得票率を誇ったモストウフィヨル・ママーレク（以下、モストウフィー）やモシーロフ・ドウレ、1950年代初頭の石油国有化運動の指導者として周知のモサッデグ・サルタネ（モハンマド・モサッデグ）及びレザー・シャー政権下で6年余り

（1927-33）の長期内閣を率いたモフベロフ・サルタネ（ヘダーヤト）もそこに含まれる。立憲革命においてデモクラート党の急進的指導者として知られたセイエド・ハサン・タギー・ザーデの場合には、ヘダーヤト内閣で一時財相を務めた後、駐仏公使として赴任したが、肅正の恐れから政府の帰国命令に従わず、所謂「亡命」への道を選んだ。また、コサック将校時代からのレザーの側近で、1931年から政府指導者・軍将校の動向監視やティムールターシュとアスアドの逮捕・殺害に関与し、その独裁を影で支えたと言われる警察長官モハンマド・ホセイン・ハーン・アーイロムも身の危険を敏感に察知し、1935年には国外逃亡した。

レザー権力拡大に警鐘を鳴らし続けた故に危険視され、追放のうえ最終的には殺害された宗教学者セイエド・ハサン・モダッレスやコミュニストを含む多くの反体制活動家だけでなく、直接間接に独裁体制に与した政治家・官僚・知識人・軍人でさえも生命の安全が保証されない「窒息的」政治情勢は

こうして形成された。その際、カトウズビアンが指摘する如く、「レザー・シャーの周囲にあった者たちは・・決して主体性を欠く従属的追従者やクライアントではなかった」<sup>4)</sup> ことには注意を払う必要がある。レザー独裁の成立・発展に寄与・加担した者の中には全員ではないにせよ、政治的野望と恐怖だけでなく、祖国の主権確立、安定と繁栄達成と言った民族主義的動機が内在し、レザー擁護に走った者も含まれていたと考えられるからである。つまり、レザー支配の「分業」体制に参画した彼らの中には、祖国の発展を希求するが故にレザー体制に一縷の望みを託しながら、最後に裏切られていった民族主義者の末路を見ることがもできる。

小論はパフラヴィー朝期を通じて約350名に及んだ閣僚経験者の中でも、三度内閣を率いた経験を持つモハンマド・アリー・フォルギーの政治的役割を検討する。彼について、その政治的役割の重要性にもかかわらず、未だ十分な検討が施されていないが、更にレザー独裁への彼の関与と政治活動及び思想を関連付け、分析した論考も皆無に等しい状況にある<sup>5)</sup>。ここでは新たに発掘された資料に基づくものではないが、既存のペルシア語資料と先行研究での議論を踏まえながら、彼の独裁擁護の背景と役割を考察し、最後に未だ議論の分かれる彼の政治的評価を再検討し、レザー・シャー軍事独裁と文民政治家との関係性を考察するひとつの素材を提供できればと考えている。

## 2. レザー・シャー独裁成立前のフォルギー

ところで、生い立ちから第一次大戦直後までのフォルギーの人生の歩みは後年レザー・シャー独裁への彼の関与と性格を知るひとつの手掛かりを与えるものである<sup>6)</sup>。従って、その点を少しここで素描すれば、まず彼は1877年に当時のガージャール朝第4代国王ナーセロフ・ディーン・シャー及び第5代モザッファロフ・ディーン・シャー統治期に詩人・教育者として知られたモハンマド・ホセイン・フォルギーを父にテヘランで生まれている。5歳の頃から学究肌の父の庇護を受けた彼はペルシア語・アラビア語を学んだ以外に、家庭教師の下でフランス語と英語に親しむ機会を得ている。つまり、「西欧近代」諸学に目を向ける家庭環境にあったが、親の彼に対する期待は英仏語を通じた医学や薬学の修得にあったようである。しかし、1889年に入学し

た「ダール・オル・フォヌーン Dar al-Fonun」（1851年創設のイランで最初の近代的高等教育学校）の初等科修了後、フォルギーは哲学・文学・歴史などの人文科学へ関心を高め、大きく進むべき道を修正していく<sup>7)</sup>。それは彼が政治家としての道を歩み始めるひとつの前提を構成したと言える。

17歳の時、フォルギーは父モハンマドがその長に任じられた「翻訳局 Dar al-Tarjama」で翻訳者として採用されると同時に、新設の国民学校 (Madrase-ye Melli) を手始めに、21歳で母校ダール・オル・フォヌーンにおいて歴史と政治学を、1903年には父が学長を務める新設の「政治学カレッジ Madrase-ye 'Ali Siyasi」で国際法の教師として任用された。翻訳、教育、教科書編纂作業等を通じて、様々な学問的知識を蓄えたフォルギーは父の死（1907年）後、わずか30歳で政治学カレッジの校長に任命され、また父の「王国の太陽 Zoka al-Molk」という称号も引き継ぐことを認められた。

こうした彼の青年期は立憲革命に至るイランの激動期にあり、彼はそれとの関わりで1907年に『基本的権利—即ち、諸政府の立憲制のルール *Hoquq-e Asasi Yani Adab-e Mashrutiyat-e Doval*』を著している。主権在民と国民の権利促進・保護を義務とする政府の位置付け、立法・行政の並立した立憲政治の歴史的正当性、自由・平等の政治社会的意義を説いたこの書物には、明らかに立憲的民主主義者としての彼の政治姿勢が認められる<sup>8)</sup>。これに前後してフォルギーは議会（マジレス）議長サニーオッ・ドウレの依頼を受けて同事務局メンバーとして議会内規の作成に従事し、更に近代改革の必要性を訴えたマルコム・ハーンの「忘却の館 Faramush-khaneh」の後継組織「アーダミヤト協会 *Jame'-ye Adamiyat*」にも参加している。

父の影響下でこうした組織に参加したフォルギーは更に、1908年4月に他の知識人やテヘラン在住フランス人らと共にイランで最初の（或いは上記2組織を加えれば、第3の）フリーメーソン組織「イラン覚醒ロジジ *Lojh-e Bidari-ye Iran* 又は *Reveil de l'Iran*」の創設に加わっている<sup>9)</sup>。177名のメンバーを有したこの反専制組織は設立数ヶ月後に発生した第6代国王モハンマド・アリーによる議会砲撃で始まる小専制期（1908-1909）に弾圧の対象となったことは知られている。しかし、評価が難しいのは「世界的な自由主義思想や宗教的寛容」を説くフリーメーソン組織が一方で、「西欧」関与の、そ

れ故列強の利益に奉仕する秘密「陰謀」組織として見なされるからである<sup>10)</sup>。ともあれ、「イラン覚醒ロジック」での翻訳・説教活動とそこでの人脈から、フォルギーは小専制打倒後の第2議会（1909年11月開会）選挙ではテヘランから初当選し、35歳でモスタシャーロフ・ドウレの後任として議会議長にも選出されている。

以来、本格的に政治に関与することになったフォルギーは新国王アフマド・シャーの家庭教師を務める傍ら、ナーセロル・モルクの摂政就任に協力し、ガージャール政治の中枢近くに深く入り込んで行った。例えば、米国人財政顧問モルガン・シャスター罷免を要求する英露の最後通牒に直面し、第2議会が閉鎖された後は、摂政の推薦で1911年に財相として初入閣（1ヶ月程度に過ぎなかったが）した後、次の内閣でも司法相に抜擢された。それも彼の「公正観や法的知識」に感銘を受けた司法省顧問で法律教師を兼務したフランス人A.ペルニの推薦によるものとされる<sup>11)</sup>。しかし、首相（サムサーモツ・サルタネ）との確執から、司法相を辞任した彼は翌年には控訴高等裁判所初代長官に任命され、民事法廷手続きの改革や新たな刑事法の草案作成審議委員会の組織化など、西欧モデルに沿った法制度改革を指導した。

ところで、先に若干言及したように、多くの有力政治家や知識人は英露の介入による立憲革命の挫折以後、イランの政治社会及び経済の混迷を認識し、より中央集権的な政府樹立を重視する志向を抱き始めている。具体的には第一次大戦での国土の戦場化、亡命政府の樹立、イランの保護国化を目指した英国との1919年秘密協定調印と言う当時のヴォスーコフ・ドウレ政府の「売国的政策」、それに反対するギーラーン及びアーザルバーイジャンでの地方革命政権の成立、それらの窮状を克服できない中央政府の脆弱性がそうした政治認識を強化した要因として挙げられる<sup>12)</sup>。そして、フォルギーも他の多くの知識人や政治家同様、中央集権化志向を共有したと言うことはできる。唯、彼の場合には外国語能力と法的な知識への期待から派遣されたパリ講和会議での経験がより重要な契機になっていると考えられる。

父モハンマドと同様に、極めて温厚な人柄で知られたフォルギーはそれ故、感情を吐露することは極めて少なかった。しかし、戦争賠償の獲得と19世紀以来の喪失した領土回復要求のために派遣されたフランス滞在中に、彼

は「1919年協定」交渉に秘密裏に従事するヴォスコーツ・ドウレ政府に対して抑制を効かせながらも、憤りを示す電文を打電している。それは、同じくフリーメーソン指導者で、閣僚経験豊富な友人エブラヒム・ハキミーを通じて以下のテヘラン政府宛の電文である。

「我々がテヘランを出発して6ヶ月が過ぎ、パリに滞在して約5ヶ月となる。…我々は国の情勢、政府の政策、対英交渉やその結果、更に方針全般に渡って情報を得ておらず、指示の一言も…ないままに我々の電文への回答に対する沈黙が守られている。3ヶ月の間首相から2通の電文も届かない中で、我々は辞任するが、それは受理されていない。…テヘランからの電報やパリの外務省から得た情報、更に英国人発言から推測できることは、英国が政治・経済的にイラン国家を自らの手中に置こうと準備し、テヘランの状況を助け、利用していることである。…パリにいる我々はこの目的には邪魔な存在である」<sup>13)</sup>。

更に、別の書簡で彼は何よりも祖国イランにおける事実上の政府・国民の不在状況に絶望感を露わにし、「英国が全力をあげても、イランに対して何もできない」としつつ、「我々イラン人を活かし、巻き上げる」ことが英国の精々できることであるとも主張する。その点で「反英主義者」と思われがちの彼をしかし、実際そう決め付けることができないのは、更に上の書簡で「無論、私はイラン人が英国と敵対すべきでないと言う。そうではなく、私の考えは英国とは友好的となり、…英国利用の努力を極力行わねばならないというものである」<sup>14)</sup>と続けている点からも分かる。

ここには、彼の政治的に強固な姿勢が認められる反面、この段階で絞り込まれた英国支配の頸城からの脱却を強く欲する民族主義者からすれば、彼が「親英主義者」と見なされる点でもある。確かに、反英民族運動への具体的な参加の形跡もない彼を民族主義的な闘士と言い切ることはできない。しかし、英国立案の「1919年協定」交渉についての情報が戦後賠償要求の職務を

委ねられた彼に全く知らされなかった点での疎外感に加え、たとえ対英関係の重要性を認める彼であっても、イランの独立を損なう協定締結に走る政府とそれを許す脆弱な国民世論への苛立ち・不満を強く感じたことは間違いなく、従って彼の愛国的な思いまで否定することはできない<sup>15)</sup>。

フォルギーのヨーロッパからの帰国直前の1921年2月21日、レザー・シャー（当時、コサック軍大佐レザー・ハーン）が軍事指導者として参加したクーデターがイランの危機的政情を背景に発生した。イランの現状変革を目指し、更にその後政府軍の下で国内の治安回復と中央集権化が具体的な成果を収めていく限り、フォルギーにはクーデターと指導者レザーを反動視する理由はない。また、彼がレザー権力にイランの明るい未来を切り開く可能性を見出しても驚くべきではない。穏和でリベラルな政治姿勢を有するフォルギーと独裁化を遂げていく軍人レザーの奇妙だが、自然な同盟関係成立の条件はこうして整っていく。

### 3. レザー独裁体制下でのフォルギーの「役割」

クーデターから2年後に成立したモストウフィー内閣（前出、1923年2月-6月）において、レザーが陸相として、フォルギーが外相として入閣し、両者は始めて同席した。帰国後、控訴高等裁判所長官に就任していたフォルギーは初めてここで外交分野の最高責任者となった。ヌーリーによれば、この最初の出会いで当時十分な教養のなかったレザーは全ての閣僚から賞賛され、知識人にありがちな如何なる虚栄心を示すことのないその特質から、フォルギーに強い関心を寄せることになったと言う<sup>16)</sup>。他方、フォルギーもイランの独立を口では強調する知識人や政治家にない「強力なカリスマ的」軍事指導者としての性格をレザーに見出したに違いない。

その結果、続くモシール内閣（1923年6-10月）での財相就任を経験したフォルギーはレザー首班の第一次～第二次内閣（1923年10月～1924年8月）では外相、その後第三次～第四次内閣（1924年8月～1925年10月）では財相に選出されている。この間、彼はレザーが裏で画策したと考えられる共和制樹立キャンペーン（1924年1-3月）を支持した。また、同運動の挫折で被った政治的権威の失墜を回復するためにも実施されたシェイフ・ハズアル指導下のア

ラブ討伐（フーゼスターン遠征）時には、フォルギーは首都を離れざるを得なかったレザーの首相代理を務めている<sup>17)</sup>。ガージャール朝廃絶・レザー暫定政権樹立への議会承認から制憲議会によるパフラヴィー王朝創設承認までの約40日間、フォルギーは同議会選挙と召集に責任を持つ暫定首相を務めるなど、両者の間には一種の「信頼関係」が成立していたと言えよう。

さて、パフラヴィー王朝成立後のフォルギーの政府関係の経歴を端的に示せば、以下の通りとなる。

1925年12月-1926年6月	パフラヴィー朝初代（第1期）首相
1926年6月-1927年5月	モストウフィー内閣陸相、27年4月渡仏
1927年6月-1930年4月	トルコ駐在全権大使
1928年9月-1930年4月	国際連盟初代イラン代表兼務（この間、1929年9月～30年1月まで同連盟理事会議長）
1930年4月-5月	国民経済相
1930年5月-1933年9月	外相
1933年9月-1935年12月	首相（第二期）
1941年8月-1942年3月	首相（第三期）
1942年3月-11月	宮廷相（閣外のシャー顧問）

これらの中で、陸相ポストは軍部の最高権限が事実上レザーによって掌握されていたため、名目的な役職に過ぎず、国民経済省は新設の省であり、彼の在任期間の短さから特段成果をあげ得たとは言い難い。それ故、重要なのは残るトルコ駐在大使、首相及び外相職を通じたフォルギーのレザー体制下で役割ということになる。相互に重複するものとは言え、それらの内容を以下幾つかに分けて検討したい。

#### 1) パフラヴィー独裁への「民族主義的」性格の付与

その温厚な人柄と公正観を特徴とする知識人フォルギーのレザー独裁への役割の第一はこの体制に「民族主義的」な性格を与え、前ガージャール（トルキヤマン系）王朝と異なる由緒正しきイラン（民族）王朝として位置付け

る試みに見られる。この点は彼が1926年4月25日に開催されたレザー・シャーの戴冠式で首相として表明したその演説内容に明示されている。

「イラン国民の名士諸氏がこの場に喜びと誠実さ、善意に溢れた心情をもって臨席されるこの素晴らしい式典の必要性は単に新たな国王がこの歴史ある王位に就き、カヤーニー朝（ペルシャ神話の王朝）の王冠を頭上に頂くだけでなく、再び小川に水が流れ、神意に従って絶望と辛苦の時代が終わりを告げ、誇らしき栄誉ある時代が訪れた吉報が抑圧されたイラン国民に届いたためである。…新国王が今日清浄な生まれとイランの血統を持ち、…王位を自らの快樂や欲望や幸福のために選んだのではなく、王国と政府の復興上の尋常ならざる労苦と努力を見返りに、そして様々な人々の安寧とこの国土繁栄の源を準備する自らの神聖な意志の実現のために獲得した王位であるとイラン国民は理解している…」<sup>18)</sup>

露骨な「追従」と受け取られるフォルギーのこの演説は、既に19世紀末以来ローリンソン（George Rawlinson）著『サーサーン諸王朝の歴史 *Tarikh-e Salatin-e Sasaki*』（原題 *The Seventh Great Oriental Monarchy, or, the Geography, History, and Antiquities of the Sasanian or New Persian Empire*）を手始めとした英仏語からのイラン史関係の歴史書の翻訳、小中学校やカレッジ用のテキスト編纂を通じて培われてきた知識と民族主義的想いから抽出されたものである。こうした知識は無論、レザーにとってかけがえのないものであったと言える。政変を契機に、その後軍部を基盤に台頭した彼にとっては、新王朝の歴史性・民族性と前ガージャール朝との断絶をかかえる戴冠式で如何にアピールするかは自己の統治の正統性の柱に相違なく、それを行い得る信頼の置ける側近こそが必要であったからである。1925年12月の初代首相選出に際して、議会の推薦したミールザー・ハサン・ハーン・モシャール（モシャール・モルク、当時外相）を敢えて拒否してまで、レザーが「ある政治的配慮」からフォルギーの首相選出に拘泥した理由もそこにある<sup>19)</sup>。

これとの関連で若干説明が必要なのは、既に別稿でも論じたが、レザーには隣国トルコの民族主義指導者ムスタファ・ケマル（・アタチュルク）の如き華々しい民族解放運動の指導歴がなかった点である。ケマルの場合、1907年には「祖国と自由」をダマスカスで組織し、反専制運動を開始したのを皮切りに、その後も対イタリア戦争（1911-12）、バルカン戦争（1912-13）に従軍して戦功を残し、特に第一次大戦後は「アナトリア＝ルーメリア権利擁護委員会」のリーダーとして、即ち民族運動の政治指導者として一躍台頭した。更に、トルコを解体寸前に追い込んでいたセーヴル条約（1920年）を19年以來の祖国解放戦争の勝利で無効化し、ローザンヌ条約（1923年）によって現在のトルコ共和国（1923年成立）の礎を築いた民族指導者がケマルであったことも周知の通りである<sup>20）</sup>。

しかし、レザーの場合は彼と比較し、逆にロシア人将校率いるコサック軍一兵卒から将校へと昇進を重ねた経緯にも関わるが、民族民主主義運動の弾圧者側にあつて、その政治的台頭も「英国陰謀説」が囁かれたクーデターを契機としている。イスメト・イノニユ（初代トルコ共和国首相、第二代大統領）を初め、解放闘争を共に闘った多くの民族主義的サブリーダーに囲まれたケマルと、陰謀渦巻く政治環境の中で信頼可能な同志に恵まれなかったレザーとの相違も大きい<sup>21）</sup>。フォルギーがトルコでの動きとケマルの動向にどれ程注目していたかは資料的に確認できないが、彼がレザーの中にケマルと同様の民族指導者の姿を見たとしても不思議ではなかった。だが、社会に根強い影響力を保持するシーア派宗教勢力の存在を含め、両者の政治社会的環境のギャップは如何ともし難く、その点でトルコにおいて「ケマリズム」という名で理念化された建国原則をイランに確立することは著しく困難であった。フォルギーはその意味で、「パフラヴィズム」をもたらし得る可能性を秘めた政治家のひとりであったとも言えるが、彼自身がどの程度かかる両国、そしてケマルとレザー間に存在した深刻な相違を認識していたかは問われねばならない。

## 2) 外交的「仲介者」としての役割

次に、1927年から約4年に渡って赴任したトルコ駐在大使としてのフォルギー

ギーの役割が注目されねばならない。これは1926年4月のイラン・トルコ友好条約調印での経験を踏まえ、宮廷相ティムールターシュが子息留学のために渡欧中であったフォルギーを抜擢した人事であり、彼の希望を考慮したものではなかったが、彼が外交上果たした役割として特筆される必要がある。また、1927年段階でイラン・トルコ関係が国境問題にクルド問題が絡み、良好と言い難い状況にあったからでもある。

オスマン帝国（1299-1922）とサファヴィー朝ペルシア（1501-1736）期まで遡及可能な両国国境問題の推移をここでは到底詳述できないが、当時イ・ト両国間には幅40kmの国境ゾーンが存在したことで確認できるように、国境線は20世紀になっても未だ明確さを欠いたままであった<sup>22)</sup>。1913年コンスタンチノーブル議定書では現在のイラク国境部分を中心に暫定的な合意が図られたが、トルコ共和国との国境については同合意に基づき227の標柱が建てられたに過ぎず、それ故新生国家の枠にとらわれないクルドが自由に遊牧や略奪を繰り返すことが常態であった。彼らの存在故に、自国領内のクルド鎮圧の成功も直ちに当該地域での治安の確保に結果せず、政府の権威と統一的な中央集権的制度の確立は困難を極めた。例えば、一旦トルコ政府軍の前に敗走したクルド部族勢力もイラン領内の山岳地帯に避難し、再蜂起を準備する状況が認められた。その結果、両政府間での国境線の画定と同時に、クルド統治の両国間での共同歩調も必要とされたと言える<sup>23)</sup>。

これと共に、トルコ政府が当時イランの対クルド政策に強い不満を持ち、時に討伐のために軍を越境させる事件も両国の関係悪化をもたらした。上記の1926年条約で確認された友好・中立・不可侵の三原則も、クルド統治をめぐっては有名無実の取り決めでしかなかった。その結果、「領土的野心」を持つとされたトルコ反対キャンペーンがイランで組織された。クルド武装勢力によってトルコ領で捕虜とされた一部トルコ軍部隊がイラン政府当局に引き渡されたとの噂から、トルコ側も抗議のためにイラン駐在大使引き上げまで行っている<sup>24)</sup>。フォルギーはかかる緊張した両国関係修復に従事した。

その場合、歴史と国際関係に造詣深い学者としての才能を活用したフォルギーがケマルやイノニュなど、トルコ政府指導部の信望を獲得し、適宜謁見を許されたことは知られている。1928年6月には、交渉の末にクルド問題に

対応していなかった26年友好条約に議定書を加え、更にトルコ領クルドの蜂起勃発から両国関係が再度緊張した1929-1930年にも、1930年5月から外相ポストにあった彼の指導下で対トルコ交渉が実施された。その結果、関税協定が締結され、3世紀に及んだ国境問題に終止符を打ち、アラス及びカラス両河川の合流地点からトルコ・イラク国境とぶつかる地点までの詳細な国境線合意を定めた条約が1932年1月には調印された。更に、同年11月には友好条約が再締結された他、中立・政治経済協力条約と犯罪者引渡し暫定合意文書も調印された<sup>25)</sup>。後者は懸案のクルド問題への両国合同での対応を意味した。かかる外交上の成果をフォルーギーひとりの努力に帰すことはできないにせよ、彼のトルコ指導部との信頼関係を前提にした交渉が実を結び、それを軸に1937年7月にはアフガニスタンとイラクを加えた4カ国不可侵（サーダーバード）条約にも発展していく点で、その役割を見逃すことはできない。

更に、老齢のモフベロツ・サルタネの後任として1933年から首相に就任したフォルーギーは良好な対トルコ関係を基礎に、レザー・シャーの同国訪問を準備している。「トルコ人は他の民族、少なくともアジアの諸民族より優位であると考え、…彼らの関心がアジア諸民族を従わせることにある」<sup>26)</sup> 旨を友人に書き送りながら、34年5月の議会演説で彼はケマルからの公式訪問招請を発表し、国王のトルコ訪問が過去の「誤解と対立」に満ちた両国関係を一層好転させる契機となる点を表明した。そして、同演説で「新生イランとトルコが共に思慮深い指導者を戴き、その監督下で両国を進歩と向上の王道へと…導いて」<sup>27)</sup> いるとの発言から看取されるように、彼がトルコの近代化政策の進展に着目し、そこに祖国の将来像を構想していたとすることはできる。レザーは1934年6月から当初の2週間の予定を40日まで延長し、初の外遊先としてトルコ訪問を実施した。ケマル他同国政府指導者との会談や視察を終えたレザーは帰国後、一層ドラスティックな政策を断行する。その中で、種々の「民族文化」的諸政策でのフォルーギーの役割が次に注目されるが、それと共に事態は彼の予想を超えた展開を示していく。

### 3) 文化政策面でのフォルーギーの限界と失脚

フォルーギーが「パフラヴィズム」の定式化の可能性を有した知識人であ

ったと先に指摘したが、それとの関連で彼は1934年後半から種々の文化政策に着手している。彼が民族詩人としてこよなく愛した『王書Shahnameh』の著者フェルドウスイー（940頃-1025）「生誕1000年祭」という、国家的一大行事開催もそのひとつである<sup>28)</sup>。45名もの海外からの東洋学者（オリエンタリスト）や外交官らを中心に多数の政府招待客が出席した国際会議が10月初めより首都テヘランで連日の如く開催され、その後同月12日からはフェルドウスイーの生誕地（トゥース、首都より東900km）に場所を移し、敷地面積25000平方km内に建立されたその廟（Aramgah-e Ferdousi）の除幕式典が開催され、クライマックスを迎えた。1928年着工の廟・関連施設建設と式典開催費用の総額は不明だが、その巨費を賄うためにフォルギーの発案で「宝くじ」さえ売り出されている<sup>29)</sup>。

その他、同年9月末の「工学カレッジDaneshkade-ye Fanni」の開校でもフォルギーが中心的役割を担ったことが指摘されるが、翌1935年5月に「ペルシア語とペルシア文化の保護」を目的に創設された「ファルハンゲスターン Farhangestan-e Iran」協会は更に重要であろう。そしてその知識人としての能力を高く評価されたからこそ、フォルギーはレザーによって初代会長にも任命されている<sup>30)</sup>。

キアによって既に分析された如く、特にこの協会の主要な活動に定められたのは圧倒的なアラビア語(彙)のペルシア語からの排除という課題であり、それは19世紀初め以来、数多くの民族主義的知識人の議論の焦点のひとつであった。トルコ訪問後、特に「上から」の世俗（反イスラーム）的な民族主義を一層強く訴え始めたレザー・シャー政権下でも、その点は同様である<sup>31)</sup>。例えば、フォルギーが1937年に記した『ファルハンゲスターンへの我が伝言』によれば、同アカデミー設立当時、アラビア語彙の無条件・無制限の流用を支持する「宗教的狂信主義」のグループと、徹底したペルシア語浄化を支持する「排他的民族主義」グループが存在し、そこに妥協点を見出すことができなかったことにも窺える<sup>32)</sup>。アラビア語とイスラームの通曉に同一の価値を見出す前者はそれ故、如何なる浄化論にも反対する保守的立場にあり、他方7世紀のアラブ・ムスリムのペルシア征服を劣った民族（アラブ）の言語文化の浸透と同一視する後者はアラビズムの徹底排除の立場で前者と対立し

た。

そうした中であって、こうした賛否両論的立場のいずれか一方に与するよりも、当時のペルシア語におけるアラビア語彙の異常なまでの多さとその語形変化を残したままの母語への悪影響を「欠陥」・「不完全さ」の証と見るフォルギーの主張は確かに「中道的」である。例えば、彼は「イスラームへの愛着から全ての者がアラビア語を学習し、イスラームの教えを学ばねばならないのであれば、極めて時宜に適い、賞賛すべき」としつつ、しかしイスラーム信仰とアラビア語彙の豊富な活用は本来無関係であると指摘し、他方で後者のペルシア語の徹底的浄化が反アラブ感情に基づくのではなく、「合理的かつ科学的」に模索され、ペルシア語の「美と活力と力強さ」の維持に心を砕くべきと主張するからである<sup>33)</sup>。

彼らを共に「極端主義者」と呼ぶフォルギーの議論はしかし、当時のイランの政治社会状況に受容されるものでなかった。彼をファルハンゲスターン初代会長に任命した国王レザーがより過激に言語浄化を期待する後者の立場にあり、他方で社会的には前者の主張の根底にあるシーア派宗教勢力の影響力も衰退傾向を辿っていたとは言え、未だ無視できぬものであったからである。1935年7月の「ゴーハルシャード（・モスク）事件」の発生はこうしたフォルギーの直面した言語文化的レベルでの挾撃をより深刻な政治的次元に移し換えた事件であった。

これについても別稿で論じたため、あくまで概略に留めるが、それはトルコ訪問の影響下でイスラーム・太陰暦（ヒジュラ暦）廃止・太陽暦の採用、ペルシアからイランへの国名変更、新たな「国際帽」の着用強制措置など、一連の反宗教的民族主義政策が採用され、更に女性のヴェール廃止へと突き進むことが予想される中で、宗教都市マシュハドのシーア派第8代イマーム・レザー廟内モスクで発生した抗議運動とそれに対する武力弾圧事件である<sup>34)</sup>。そして、これは当時首相のフォルギーが第三者的に傍観できる事件ではなかった。彼の娘婿の父親で同廟管財人ミールザー・モハンマド・ヴァリー・ハーン・アサディーが死傷者数百名、逮捕者800名以上を出したこの抗議運動での「首謀者」と見なされ、逮捕されたからである。そして、アサディー（1935年12月銃殺）と共に逮捕された娘婿釈放を嘆願した彼はレザーの不興を買い、

「消え失せろ。この顎髭を生やした女め！」との罵声を浴びて、首相ポストと共に協会会長職からも直ちに罷免されている<sup>35)</sup>。その結果、ペルシア語改革におけるフォルギーの中道的な改革も殆ど成果を残さぬままに終わった。以後約6年間、フォルギーは一切の政界との交わりを絶ち、「最も実り多い」と自ら記す研究・執筆活動に励む日々を送ることになる。

フォルギーは本来トルコ訪問を通じてレザーに近代化の推進を期待した。しかし、そうした意図とは裏腹に、レザー独裁は一層深化し、彼自身の失脚に結果した。そこには、浮き彫りにされた両者の政治方針の齟齬があるが、フォルギーはそうした相違の拡大する傾向を明らかに見逃していたことは指摘されねばならない。

#### 4) レザー・シャー独裁の終焉とフォルギー

レザー・シャー独裁の崩壊の直接的な契機となるイラン暦「1320年シャフリーヴァル月3日」事件、即ち1941年8月25日の英ソ両軍による共同進駐前後の国際関係の変動はそれに至る第二次大戦下でのイランの対外政策及び内政動向を前提に改めて検討せざるを得ない課題である。だが、この英ソ共同進駐が大戦下でのドイツ人（英国の推定で2000～3000人）工作員の脅威除去（英ソによる対イラン要求内容）によるものであれ、また対ソ軍事物資輸送ルートとしてのイラン国土及び縦貫鉄道の地戦略的価値（米国ローズヴェルト政権の「武器貸与法 Lend-Lease Act」の実施）、更に石油資源確保（の戦略的重要性）に発するものであれ、英ソ両政府がこの侵攻・占領を有利な戦況展開のために不可欠と見なす一方、イラン側指導部がこうした英ソの構想に余りに無警戒であったことは否めない<sup>36)</sup>。独裁の支柱として当時12～14万の兵力を誇ったイラン軍は散発的抵抗を試みたが、各戦線で脆くも敗走した。レザー・シャー政権の命運は英ソ代表も参画する交渉の場に持ち込まれた。突然、レザーからの首相就任を要請されたフォルギーはこうした対英ソ交渉でのイラン側の責任者としてイニシアチブを取ることになる。

そこでのフォルギーの役割に関連し、前述の如くゴーハルシャード事件に連座した罪で娘婿を逮捕・投獄され、またその父（アサディー）を処刑された彼に首相就任を要請するに至った経緯については諸説がある。例えば、

当時道路相のモハンマド・サッジャーディーによれば、8月27日に英ソ共同進駐とイラン軍の壊滅状態の報を受け、自らの退位の意志を固め、しかし皇太子（モハンマド・レザー、当時21歳）への王位継承への期待を有したレザーが急遽開いた閣議で、アリー・マンスールの後任首相候補として意見を求めた際、マジード・アーヒー（当時、司法相）がフォルギーを推薦し、アリー・ソヘイリー（司法相）及びサッジャーディーがこれを支持した結果、宮廷に呼び出された彼がこれに快く応じたと言う<sup>37)</sup>。他方、軍人ホセイン・ファルドウストは皇太子からの伝聞として、レザー自身が26日にこの国難から逃れる助言を得るため、密かにフォルギーを自宅に訪ね、その結果彼が英ソ軍への抵抗の即時停止命令の発出を条件に、首相就任を快諾したとも指摘される<sup>38)</sup>。更に、アシュラフ・パフラヴィー（王女）は病身に既に精神的にも弱っていた父レザーが「英国が間接的に旧高官の内3名のみと交渉可能である」旨を間接的に理解し、その中に彼女が「最良」と評するフォルギーの名もあったと言う<sup>39)</sup>。

以上のいずれが事実であるかは当面判断できないが、重要なことは、当時異例な車による宮廷参内を許されたフォルギーの首相抜擢がその穏健さ、学識と外交での交渉能力に加えて、英公使館との良好な関係を考慮された結果であったことにある。8月28日付けの電文で、公使ブラードはフォルギーの首相任命を「明らかに我々に迎合する」ためと本国に打電している<sup>40)</sup>。だが、この段階でゴールハルシャード事件の影響で失脚した彼に政治的野心がなかったとしても、レザーに対するかつての忠誠心は希薄化していた。夫（アクバル・ハーン・アサディー）の釈放を願う娘からの懇願に、フォルギーは忍耐を求め、レザー擁立における自らの役割に関連付けて、自分には「罪はなく欺かれていた。この男（レザー—筆者）は王朝設立当初に法について語り、・・・決して誰であれ違法は許されないと述べていた」<sup>41)</sup>。この釈明にはレザーへの過去と異なる彼の否定的判断が見て取れる。

首相に就任した彼は8月28日、レザーの事前許可を得ることもなく、閣僚メンバーをマジレスに報告すると共に、一切の戦闘停止と対連合代表者との交渉に関して信任を獲得した。そのうえで人心の動揺を抑える宣言を発表し、直ちに外相アリー・ソヘイリーと共に英国公使ブラード及びソ連大使スミル

ノフとの外交交渉に着手している。同30日には英ソから連合国として各々に  
対イラン要求が明示され、それに対して翌日フォルーギー政府も占領被害を  
最小限度に食い止めるべく、条件を付けつつも、概ね軍の無抵抗撤退、食糧・  
施設の対連合国軍への供与、イラン在留ドイツ人の（しかし「安全な」）追  
放措置、軍事物資の輸送などに関わる英ソの要求を受諾した<sup>42)</sup>。その後も継  
続される対英ソ交渉と同時並行的に、フォルーギー政府は米国ローズヴェル  
ト政権を「小国の権利と主権の擁護者」と位置付け、外交的アプローチを開  
始した。

しかし、こうした外交活動の活発化で危機が去った訳ではなく、王族のテ  
ヘラン脱出準備（8月27日）と英ソ両軍の首都占領の噂から、テヘラン住民の  
不安感は拡大している。加えて、レザーは枢軸国側の反撃に望みを繋ぎ、未  
だ公然と連合国側の要求に屈した姿勢を示さず、特に通信輸送機関の明け渡  
し要求を進んで受け容れようとはしなかった。また、テヘラン駐屯軍基地の  
惨状や頭越しでの軍に関する決定実施に憤慨した彼はフォルーギー任命の陸  
相代理アフマド・ナフジュヴァーン更迭と軍法会議さえも独断で開催しよう  
としていた<sup>43)</sup>。かかる独裁的手法から未だ抜けきらないレザーの動きが英ソ  
代表との外交交渉に臨んだフォルーギーの失望を一層掻き立てたことは否め  
ない。

この時期、英国政府（内）及びイラン駐在公使ブラードとの間でレザーの  
廃位、更にはパフラヴィー王朝の廃絶の可能性まで検討されたことは既に知  
られている。例えば、ライトは外相A.イーデン私設秘書オリヴァー・ハーヴ  
ェイの日記から、9月8日に「シャーが…追放されるべき」との印象を持った  
外務省での会合の他、同日の国防委員会でシャーの姿勢に不満を有するイー  
デンが今や「レザーの第三王子か私のガージャールの友人に対して真剣な検  
討を加えた」がっている旨を記したL.C.M.S.エーメリー（インド担当相）の  
日記内容を伝えている<sup>44)</sup>。また、共和制樹立も検討されたが、その場合初代  
大統領を誰にするかをめぐって英ソ間での意見調整が不調に終わったことも  
指摘されている。

この点で注目されるのはフォルーギーの存在である。例えば、共和制採用  
の場合、ソ連の推すモハンマド・サーエド（元モスクワ駐在大使）に対抗し、

英国が初代大統領就任の意向を打診したが、これを固辞したのは彼であった。また、第三王子（ゴラームレザー、当時18歳）の新国王推戴やガージャール朝の復活（第7代国王アフマド・シャーの弟で元皇太子モハンマド・ハサン・ミールザーの擁立）にせよ、ブラードと協議したフォルギーがいずれにも否定的見解を示したことも、彼の意見がレザー・シャー後継体制に関して重要な意味を持ったことを示している<sup>45)</sup>。レザー退位の既成事実化を促すため、レザーを激しく非難するBBCペルシア語放送が9月10日前後から連日繰り返される中で、12日にはレザーの退位が最終的に決定され、翌日にフォルギーから皇太子モハンマド・レザー即位について、英国が公に反対しない間に退位することをレザーに迫る要求が突き付けられている。皇太子の即位はその後フォルギーとブラード間の交渉で合意され、英ソ本国政府に伝えられた。

既に英ソ両軍がテヘランへの進撃を開始していた16日、レザーは「国事に消耗し、…後身がそれを行う時が来た」との判断から、王位も皇太子に委ねるとのフォルギー作成の退位文書に署名し、その後直ちにテヘランから家族の待つエスファハーンへ旅立った。そこから、更にペルシア湾のバンダル・アッパース港に到着した翌日（28日）には、英印蒸気船でボンベイを経由した後、モーリシャスへと事実上追放された<sup>46)</sup>。この間、テヘランでは17日にマジレス緊急会合が開催され、皇太子による新シャー宣誓式が举行された。1907年憲法補則第39条の宣誓文に従い、またフォルギー作成の「過去の圧政の除去と憲法遵守」を強調する誓約を行ったモハンマド・レザーによる第二代パフラヴィー王政がここに成立する。

フォルギーは新国王の下で更に6ヶ月間首相ポストにあって、独裁体制下での政治犯を含む多くの囚人の釈放、第13議会選挙の実施と開催（1941年11月）、同議会で問題視された英ソとの3ヶ国条約の批准獲得や大戦下での経済安定と連合国との協力体制の構築に尽力した<sup>47)</sup>。この議会による不十分な信任票数への不満から首相職を辞任した後、彼はシャーの顧問的な役割を担った宮廷相に抜擢されたが、その政治的影響力は目に見えて減退した。その後、駐米大使に任命される人事は英ソのカウンターバランスとしての米国への積極的な接近策を買われたというより、彼の推薦で後継内閣を率いたアリー・

ソヘイリーに代わり、42年8月に首相に就任したガヴァーモッ・サルタネ（註39参照）及びシャーによる彼の（旧フリーメーソン・メンバーとしての）影響力排除を目的としたものであったと言われる<sup>48)</sup>。フォルギーは渡米準備に追われた11月5日、心臓病で没した。

#### 4. 結びにかえて—フォルギー評価をめぐって

以上の如く、フォルギーはレザー・シャー体制の成立から崩壊までの約15年に渡って、種々のレベルで活発な活動を展開した。しかし、対トルコ関係での成果を除いて、彼の役割はさほど報われたとは言えず、レザー・シャー体制の立憲王政に基づく修正よりも、独裁強化を招来した結果に終わったことは否めない。この点を認識したが故に、英ソ共同進駐でイランが危機的状況に陥る中、首相職に復帰した彼は英ソ両国代表との交渉を通じて、自らこの体制の終焉に止めを刺さざるを得なかったと言うこともできる。

このようなフォルギーについて、彼の友人や研究者仲間による学者・知識人としての肯定的な評価は別にして、その政治姿勢、その背景をなす人格及び役割に関する評価も多様である。そこでは、評者の立場を色濃く反映し、しばしば相対立する多様な論点が含まれている。それ故、いずれがフォルギーの実像であるかの見定めも困難である。

例えば、フォルギーを肯定的に捉える評者として、1935年頃より新聞への寄稿を開始し、欧米通のリベラル知識人として知られたヌーリーは、奉仕の精神、中立的立場、現実主義、忍耐力、冷静さと言ったフォルギーの人格的要素を特に強調し、それらがレザーや周囲の者を惹き付け、政府の種々の職務歴任の背景にあったと指摘する<sup>49)</sup>。フォルギーは彼によれば、「優しい完全主義者」とも評されたが、しかし英国公使P.ロレインはそれと異なる性格をフォルギーの中に見出している。1925年12月30日付け電文の中で、ロレインは以下のようにチェンパレン宛に書き送っている。

「彼はサイクスの『ペルシア』をペルシア語訳し、非常な書物好きである。（だが）国務大臣として、彼は極めて怠惰であり、如何なる決定

や指導力を発揮したこともない。外相として、彼は受け身的な妨害者であり、公的な書簡は何ヶ月もしばしば回答されないままである。財相として、彼は米国顧問（ミルズポー）が用意した書簡に目を通すこともなく、署名のみを行うダミーに過ぎない。同僚たちは彼を『署名機械』と名付けている。彼の二つの特質は学識と誠実さにあるが、政治的には彼は無能で、取るに足らない人物である<sup>50)</sup>と。

この点からすれば、フォルギーは「完全主義者」どころではなく、怠惰で無能さの際だった政治家である。更に、レザー独裁との関係では一層露骨な非難が多く、イラン人研究者から彼に対して浴びせられている。例えば、アッバース・エスキヤングリーは「自らの手で誰も殺害せず、脅迫することもなかった」とは言え、むしろ「大衆に反対する手荒で極端な手段を賞賛し、それを正当化する歴史的前例を生み出した」として、フォルギーを独裁の「影」の立役者として位置付けている<sup>51)</sup>。更に、フォルギーとほぼ同時期を生きた歴史家・言語学者・思想家として著名なアフマド・キャスラヴィーの場合、別の視点から彼に対する批判を行っている。レザー政権の独裁的性格を副次的に捉え、むしろそこでの中央集権化・近代化をより肯定的に捉えたキャスラヴィーは彼がレザー退位後に首相として部族有力者を釈放したことで治安の悪化を招き、加えてヴェール着用の自由化やその他狂信的とも言える種々の宗教儀礼実施を黙認し、シーア派宗教勢力の復権を促した政策を糾弾した。更に、現実世界からの逃避を促す神秘主義（スーフィズム）の唱道と執筆業を通じた「金権主義者」的な性格さえもその「罪状」に加えている<sup>52)</sup>。

以上はフォルギー評価のほんの一例に過ぎないが、相互に矛盾するそれらの諸批判の背後にあるものは評者の政治的立場、時と状況の違いに応じたフォルギーの変化以外に、彼の政治・思想に垣間見られる多面性に関わるものとして理解される。例えば、キャスラヴィーの批判に即せば、宗教擁護と宗教排斥の混在、スーフィズム支持とそれによって拒否されるべき金欲という、いずれの面でもフォルギーの多面性、見方によれば「欺瞞」として

さえ映る性格がある。そして、その点は彼の政治姿勢に顕著な「無党派性」とも深く関係している。

例えば、フォルギーは著書『ヨーロッパ哲学の推移』の執筆目的が哲学者たちの研究の受容・拒絶・批判・比較にあるのではなく、「我が同胞にヨーロッパの哲学者の思想を知らせる」ところにのみあると主張する<sup>53)</sup>。また、ペルシア語浄化運動との関連でも徹底した外国語、特にアラビア語彙排斥の立場でもなく、一方で過度のアラビア語の存在肯定論者でもないことは既述した通りである。加えて、フェルドウシー、サーディー、更にオマル・ハイヤームをイランの民族的詩人として賞賛し、またイラン人のイスラーム文明への貢献を強調した彼はしかし、決して世俗的な（即ち反宗教的）民族主義者ではなかった。「進化論を信じることは創造主の否定を必要としない」<sup>54)</sup>と主張する彼の立場には、背反する世俗性・宗教性双方に警戒的な眼差しを持つ文字通り「無党派」的、中道的な性格が顕著である。更に、イランをブロックコートの「袖口」に喩え、それを動かす「手」を英国に準える発言<sup>55)</sup>から、「親英主義者」と捉えられるフォルギーがその実、英国に従順な政治家でなかったことは1919年協定（既出）問題、1933年のAPOC（アングロ・ペルシャ石油会社）との新たな石油利権締結交渉、更にレザー後継体制をめぐる交渉でも認められる。つまり、ここで言う彼の「無党派性」とはしばしば背反的な勢力が拮抗する政治社会環境の中で見出されたものであり、それを貫きながら、また穏健かつ政治的野心のない実務派政治家として活動したからこそ、レザーによって重用された。

しかし、ペルシアの栄光の過去に想いを馳せ、ヨーロッパ近代にイランの発展の雛形を求めつつ、かかる「無党派」的立場を堅持しても、その実現は保証されない。従って、次に注目されるのはフォルギーの活動に顕著な「他者依存」の性格である。当時のイラン社会に占めるシーア派宗教勢力と欧化主義或いは世俗的民族主義勢力の拮抗、更に英露（ソ）の角逐という国際政治の「呪縛」にも制約されつつ、現状打開を求めるならば、何らかの組織や政治権力に寄らざるを得ないのは彼だけではない。そして、フリーメーソンへの参加、ガージャール朝から更にレザー独裁政権下での入閣を通じて、彼は自己の改革思想の実現を図ろうとした。しかし、それはある意味で、自己

実現の責任を自らが放棄したものである。サファイーが指摘する如く、リベラルかつ道徳的敬虔さを有し、決して悪意を持たない人物であったフォルギーは「抵抗や闘争の人物ではなく、恐らく平和と従属の手段によって多くを成し遂げることはできなかった」<sup>56)</sup>。それが他者依存によってのみ自己表現を行おうとした彼の限界であったと言える。

最後に、フォルギーは「神への崇拜と国王への愛情を有し、愛国的」な雄弁家の必要性を提起する一方<sup>57)</sup>、「社会のために哲学者が政治家となるか、或いは政治家が哲学者にならねばならない」<sup>58)</sup> 旨訴えていた。彼が前者の雄弁家となり得ても、他者依存から抜けきれず、それ故後者の「哲人政治家」の道へ自ら進むことはなかった。ましてや、彼が「社会のために」と言う時、そこに知識ではなく、イラン社会の混迷と矛盾に溢れた現実が想定されていたかどうかは疑わしい。それ故、隣国トルコを範に軍人出身のレザーにケマルと同様の役割を期待した彼の最大の錯誤は社会の側での独裁の弊害を黙認し、自らの親族が犠牲となるまでその体制維持に協力したことにある。そして、最終的には独裁者レザーを見限りはしたが、モハンマド・レザー皇太子に第二代パフラヴィー王位の道を準備し、最後まで理想視した「哲人政治家」として自らの政治責任を全うしようとするのがなかったところにも、他者依存から脱却できなかったリベラルなエリート政治家としてのフォルギーの限界と悲劇が認められる。

## 註

- 1) この点については、取り敢えず吉村「1921年クーデター内閣崩壊後のイラン政治—レザー・ハーン軍部独裁の形成に寄せて—」（『地域文化研究』広島大学総合科学部紀要Ⅰ、第23巻、1997年）135-165頁及び吉村「レザー・ハーン首相期（1923-1925年）のイラン政治—パフラヴィー独裁王政成立への胎動—」（『歴史学研究』No.738、2000年7月号）17-32頁。
- 2) 獄中で「殺害」されたとも言われるテイムールターシュについては、特に以下のレズン論文が興味深い；Miron Rezun, Reza Shah's Court Minister: Teymourdash, *IJMES*, no.12 (1980), pp.119-137.
- 3) 一連の体制内政治家・有力者の排除・肅正については、Mohammad Gholi

Majd, *Great Britain & Reza Shah: The Plunder of Iran, 1921-1941*, University Press of Florida, Gainesville, 2001, pp.172-207; Shintaro Yoshimura, Reza Shah's Changing Dictatorship and Protest Movements in Iran, 1925-1941, in Keiko Sakai (ed.), *Social Protests and Nation-building in the Middle East and Central Asia*, IDE., IDE Development Perspective Series No.1, Chiba, Institute of Developing Economies, 2003 (now in printing).

- 4) Homa Katouzian, *The Political Economy of Modern Iran: Despotism and Pseudo-Modernism, 1926-1979*, New York University Press, New York and London, 1981, p.108.
- 5) フォルギーーについてのみ焦点を当てた論考としては、Baqer 'Aqeli, *Zoka al-Molk Forughi va Shahrvivar 1320*, Entesharat-e 'Elmi, Tehran, 1367及びAhmad Varedi, *Muhammad 'Ali Furughi, Zuka al-Mulk (1877-1942): A Study in the Role of Intellectuals in Modern Iranian Politics*, Ph.D. Dissertation submitted to the University of Utah, 1992が挙げられるが、前者は幾つかの「回想録 Khaterat」を含みつつ、表題にもある通り1320年シャフフリーヴェール月（1941年8/9月）におけるレザー・シャー退位とその後数ヶ月間の政治プロセスとの関連でフォルギーーの役割を検討したものである。後者はフォルギーー研究としてはより総合的内容を含んでいるが、イラン史における彼の位置付けに関する分析は未だ十分とは言えない。ここでは入手可能であったフォルギーーの著作と先行研究に依拠し、またペルシャ語関係資料と英外交文書を用い、小論の課題に迫りたい。
- 6) 彼の伝記的なものについては、概略的なものを含めて以下参照；Ehsan Yarshater (ed.), *Encyclopaedia Iranica*, Volume X, Bibliotheca Persica Press, New York, 2001, pp.108-111; Varedi, *op.cit.*, pp.49-121; 'Aqeli, *op.cit.*, s.13-24; Mahmud Tolu'i, *Bazigarane 'Asr-e Pahlavi as Forughi ta Ferdoust*, jeld-e 1, Nashr-e 'Elm, Tehran, 1373, s.17-49; Ebrahim Safa'i, *Rahbaran-e Mashruteh, Doure-ye Dovvom*, Entesharat-e Javidan, Tehran, 1363, s.539-589; Ebrahim Khajah Nuri, *Mardan-e Khod Sakhteh*, Amir Kabir, Tehran, 1335, s.139-153.
- 7) 専攻する学問の分野の変更については、ヌーリーはダール・オル・フォヌーンでの医学教育レベルが極めて遅れており、そのため人間の生命に責任

を負えないとの自覚に発したことを原因と説明するが、他の文献では単に彼の関心が哲学・文学や歴史に移行した結果と説明される；Nuri, *op.cit.*, s.143-144; Tolu'i, *op.cit.*, s.18; Safa'i, *op.cit.*, s.542.

8) Varedi, *op.cit.*, pp.143-146.

9) イランにおけるフリーメーソンの歴史・組織について詳細は *Encyclopaedia Iranica*, Volume X, pp.205-221; Esmā'il Ra'īn, *Faramushkhaneh va Faramasunri dar Iran*, 3 jeld, Amir Kabir, Tehran, 1357.

10) この点で、一般にイランの戦間期は弾圧の恐れからフリーメーソンの「活動休止期」と見なされるが、この点との関連で1990年代のイランで戦間期を含めた歴史過程でのフリーメーソン（系組織とメンバー）の活動の再検討を行うべきことを提起した論考が発表されているところ、以下参照；H.M. Zavosh, *Doulatha-ye Iran dar 'Asr-e Mashrutiyat 1285-1357*, jeld-e 1, Nashr-e Eshareh, Tehran, 1370; Musa Faqih Haqqani, *Zarurat-e Tavajjoh be Naqsh-e Penhan-e Faramasunri dar Tahavvolat-e Tarikh-e Mo'aser-e Iran*, *Faslname-ye Tarikh-e Mo'aser-e Iran*, Sal-e 1, Shomare-ye Dovvom, Tabestan 1376, s.9-27.

11) Nuri, *op.cit.*, s.147.

12) 吉村「イラン1921年クーデターの再検討」（『歴史学研究』第566号、1987年4月）1-6頁参照。

13) Tolu'i, *op.cit.*, s.20.

14) *Ibid.*, s.21.

15) 1917年十月革命によるロシアのイラン支配からの離脱以後、英外相カーズンの「頭腦の所産」と言われ、その交渉過程で贈収賄疑惑もある1919年英・イ協定はイラン政府省庁における広範な権限を持つ英国人顧問の採用、イラン軍再建目的の両国合同軍事委員会の設置、英国による大規模借款の供与、イラン通信輸送機関建設への英国の全面協力、関税協定審議の合同専門家委員会の設置などを含むところ、協定締結の背景・交渉過程・内容・影響については、Nasrollah Saifpour Fatemi, *Diplomatic History of Persia, 1917-1923*, Russell F. Moore Comapany, New York, 1952, pp.1-120; Wm. J. Olson, *Anglo-Iranian Relations During World War I*, Frank Cass, London, 1984, pp.224-249; Shaul Bakhash, *The Origin of the Anglo-Persian Agreement of*

- 1919, *Asian and African Studies* 25 (1991), Haifa, pp.1-29;
- 16) Nuri, *op.cit.*, 149.
- 17) この任命の理由について、英臨時代理公使オヴェイは「テヘランの首相代理は・明らかに陰謀を行わない者として、如何なる行動の採用も回避する者として選出」された旨指摘している；Telegraph from Mr. Ovey to Mr. Austen Chamberlain, November 8, 1924 in Robin Bidwell (ed.), *British Documents on Foreign Affairs*, Series B, Part II, University Publication of America, 1990.尚、小論では英外交文書は上記資料集 (*B.D.F.A*と略記) に因り、以下は送信・受信者名、送信年月日のみを記す。
- 18) フォルーギーの戴冠式演説の全文は、Hosein Makki, *Tarikh-e Bist Sale-ye Iran: Aghaz-e Saltanat-e Diktaturi-ye Pahlavi*, jeld-e 4, Nashr-e Nasher, Tehran, 1361, s.39-43.
- 19) フォルーギーはこの最初の首相職をわずか半年で退き、モストウフィーに譲るが、それとの関連で英公使ロレインは「理由は正確には不明だが、フォルギーの活発さの無さへの苛立ちの増大」か「セイエド・ハサン・モダッレスの介入」によるものであり、特に「モダッレスの現在の明白な議論はフォルギー内閣は必要とされた機能である新政権の開始目的のためのみ任命されたのであり、・新たな理想と力が必要とされる時が訪れた今、これらの機能はモダッレス自身の友人（モストウフィー―筆者）によってのみ与えられるという趣旨である」と指摘している；*D.B.F.A.*, Despatch from Sir P. Lorain to Austen Chamberlain, June 15, 1926.
- 20) こうした民族主義的指導者としてのケマルの活動を含めて、その分析的な伝記として、以下参照；A.L. Macfie, *Ataturk*, Longman, London and New York, 1994；V. Volkan and N. Itzkowitz, *The Immortal Ataturk*, University of Chicago Press, Chicago, 1984.
- 21) レザー・シャーに関する伝記及び政治権力者としての台頭に関して取り敢えず、Donald N. Wilber, *Riza Shah Pahlavi: The Resurrection and Reconstruction of Iran*, Exposition Press, New York, 1975；Cyrus Ghani, *Iran and the Rise of Reza Shah*, I.B. Tauris, London and New York, 1998.尚、ケマルとレザーの本格的な比較研究ではないが、以下も参照；Amin Saikal *Kemalism: Its Influences*

- on Iran and Afghanistan, *International Turkish Studies*, Winter 1981-82, vol.2, no.2, pp.25-32.
- 22) トルコを含むイランの周辺諸国との国境問題については、Keith McLachlan (ed.), *The Boundaries of Modern Iran*, UCL Press, London, 1994; *Encyclopaedia Iranica*, Volume IV, 4, pp.401-418.
- 23) 対クルド政策との関連でトルコ政府側の不満を伝えるものとして例えば、*D.B.F.A.*, Despatch from Sir George Clerk to Sir Austen Chamberlain, July 6, 1927
- 24) Abdolreza Hushang Mahdavi, *Siyasat-e Khareji-ye Iran dar Douran-e Pahlavi, 1300-1357*, Nashr-e Alborz, Tehran, 1374, s.42; *D.B.F.A.*, Despatch from Sir R. Clive to Sir Austen Chamberlain, July 16, 1927; Memorandum on Turco-Persian Relations, October 17, 1927.
- 25) *D.B.F.A.*, Despatch from Sir G. Clerk to Sir John Simon, November 8, 1932; Rouhollah K. Ramazani, *The Foreign Policy of Iran, 1500-1941*, University Press of Virginia, Charlottesville, 1966, pp.271-272.
- 26) Varedi, *op.cit.*, p. 88.
- 27) Hosein Makki, *Tarikh-e Bist Sale-ye Iran*, jeld-e 6, Tehran, Nashr-e Nasher, s.145-146.
- 28) フェルドウスイー廟建設については同じホラーサーン出身の詩人で政治的活動家でもあったマレク・ショアラール・バハールらを中心に以前より政府に要求が出されていたが、こうした式典開催はトルコ訪問直後ということもあり、その影響下で特にイランの「栄光の再建」を意識した行事であったと言える。式典の経過やフォルギー演説内容などについては、*D.B.F.A.*, Despatch from Sir R. Hoare to Sir John Simon, October 19, 1934; Makki, jeld-e 6, s.172-173, 194.
- 29) Safa'i, *op.cit.*, s.551-552.
- 30) ファルハンゲスターンを含むイランの言語政策について扱ったものとして、縄田鉄男「イランの言語政策」(後藤晃・鈴木均編『中東における中央権力と地域性』アジア経済研究所研究双書No.479、1997年)、269-303頁;その他、Seyyed Nafisi, Farhangestan, 'Ali Akbar Dehoda, (ed.) *Loghat Nameh*, Vol.1 (Moqaddameh), s.97-110.

- 31) Mehrdad Kia, *Persian Nationalism and the Campaign for Language Purification, Middle Eastern Studies*, Vol.34, No.2, April 1998, pp.9-36.
- 32) Mohammad 'Ali Foroghi, *Payam-e Man beh Farhangestan*, Tehran, Bank-e Melli, 1316, s. 10; Kia, *op.cit.*, p.24.
- 33) Foroghi, 1316, s.36-41; Kia, *op.cit.*, 24; Varedi, *op.cit.*, 156-157.
- 34) ゴーハルシャード事件に関してはYoshimura, 2003.
- 35) Ne'matollah Qazi, '*Ellal-e Soqut-e Hokumat-e Reza Shah*', Entesharat-e Asar, Tehran, 1372, s.99-100;事件との関連でのアサディーの関与は彼に恨みを抱き、調査報告に捏造を加えたホラーサーン州知事ファトオッラー・パクラヴァーンによる「陰謀」との見方も報告されている。また、フォルギーの失脚は嘆願の挙に出たことだけでなく、アサディー逮捕時に彼が「雄ライオンの手は血にまみれ、屈服以外レザーの救いはどこにあるか」との詩を詠み、それがレザーの知るところとなったことが一層彼の逆鱗に触れたことや、ファルハンゲスタンでのペルシア語新造語の導入を含む浄化運動の進展の遅れに対する苛立ちも背景として挙げられているところ、Tolu'i, *op.cit.*, s.27 ; Makki, jeld-e 6, s.273; Wilber, *op.cit.*, p.169, Kia, *op.cit.*, p.25.
- 36) 英ソのイラン共同進駐決定の背景とその実施過程及び影響に関して未だ検討の余地が多いが、その詳細な分析を行ったものとして差し当たり以下参照 ; Miron Rezun, *The Iranian Crisis of 1941*, Bohlau Verlag, Koln, 1982; Homayuni Elahi, *Ahammiyat-e Esteratejhiki-ye Iran dar Jang-e Jahani-ye Dovvom*, Setad-e Enqelab-e Farhangi, Tehran, 1361; F. Eshraghi, *Anglo-Soviet Occupation of Iran in August 1941, Middle Eastern Studies*, Vol.20, No.1, January 1984, pp.27-53; *The Immediate Aftermath of Anglo-Soviet Occupation of Iran in August 1941, Middle Eastern Studies*, Vol.20, No.3, July 1984, pp.324-351.
- 37) Hosein Makki, *Tarikh-e Bist Sale-ye Iran*, jeld-e 7, Entesharat-e Iran, Tehran, 1363, s.88-97;この点で、大戦に関する意見聴取のために宮廷相マフムード・ジャムらを派遣したことがあったとは言え、突然早朝に宮廷からの電話で参内を要請されたとするフォルギーの息子モフセンの主張と一致する部分はある ; 'Aqeli, *op.cit.*, s.57-58.
- 38) Hosein Fardoust, *Zohur va Soqut-e Saltanat-e Pahlavi: Khaterat-e Arteshbod-e*

- Sabeq Hosein Fardoust*, jeld-e 1, Entesharat-e Ettera'at, Tehran, 1374, s.95-96.
- 39) 他の2名として、1921年クーデターで英国の指示を受けていたとされ、失脚以来英国委任統治下のパレスチナに居住していたジャーナリスト出身政治家セイエド・ジアール・オッディーン・タバータバーイーと1919年協定時の首相ヴスーコッ・ドウレの弟で、1921-23年に2度に渡り首相を務めるが、レザーとの権力闘争に破れた1923年10月に追放された後、フォルギーの取りなしで1930年に帰国したが、事実上政界から引退していたガヴァーモッ・サルタネが挙げられている；Hosein Makki, *Tarikh-e Bist Sale-ye Iran*, jeld-e 8, Entesharat-e Iran, Tehran, 1364, s.107-109.
- 40) Tolu'i, *op.cit.*, s.32.
- 41) 'Aqli, *op.cit.*, s.51; *Qesseha va Ghosseha*, jeld-e 1, Mo'assese-ye Farhangi-ye Qadr-e Velayat, 1375, s.24-25.
- 42) Rouhollah K. Ramazani, *Iran' Foreign Policy, 1941-1973*, University Press of Virginia, Charlottesville, 1975, pp.35-37; *Khaterat-e Nasrollah Entezam: Shahrivar-e 1320 az Didgah-e Darbar*, edited by Mohammad Reza 'Abasi and Behruz Tairani, Entesharat-e Sazman-e Asnad-e Melli Iran, Tehran, 1371, s.47-52.
- 43) 'Aqli, *op.cit.*, s.88-92; Tolu'i, *op.cit.*, s. 34.
- 44) Denis Wright, *The Persians Amongst the English: Episodes in Anglo-Persian History*, I.B.Tauris, London, 1985, pp.213-214.
- 45) 'Aqli, *op.cit.*, s.102-103.
- 46) 退位文書については、*Khaterat-e Nosrollah Entezam*, s.169; 退位から1944年7月のヨハネスブルグでの死去に至るまでのレザー・シャーについては、Wilber, *op.cit.*, pp.215-223.
- 47) Varedi, *op.cit.*, pp.102-121.
- 48) Tolu'i, *op.cit.*, s.42-43; *Khaterat-e Nosrollah Entezam*, s.180-185.
- 49) Nuri, *op.cit.*, s.145-150.
- 50) *D.B.F.A.*, Despatch from Sir P. Lorain to Austen Chamberlain, December 30, 1925; また、ロレインはその他別の電文でも「彼の疑いようなない知性とその文学的な成果は評価するが、それは彼の人格的な欠点を凌ぐものではなく、中でも力強い個性とエネルギーの欠如は際だっている」と指摘してい

س; Despatch from Sir P. Lorain to Austen Chamberlain, June 21, 1926.

- 51) 'Abbas Eskandari, *Tarikh-e Mofassal-e Mashrutiyat-e Iran*, Entesharat-e Ghazal, Tehran, n.d., s.22-26.
- 52) Ahmad Kasravi, *Dadgah*, n.p., Tehran, 1357, s.52-58.
- 53) Varedi, *op.cit.*, p.150.
- 54) *Ibid.*, p.151.
- 55) *Zohur va Soqut-e Saltanat-e Pahlavi*, jeld-e 2 (Jostarhai az Tarikh-e Mo'aser-e Iran), Entesharat-e Ettera'at, Tehran, 1374, s.36.
- 56) Safa'i, *op.cit.*, s.586.
- 57) Varedi, *op.cit.*, p.165
- 58) Nuri, *op.cit.*, s.153.

(shinyo@hiroshima-u.ac.jp)